

研究報告書第301号

知的障害養護学校における自閉症児の
教育と支援の在り方に関する調査研究

～地域のセンターとしての役割を充実させるために～

「特殊教育」から、一人一人の教育的ニーズに応じた「特別支援教育」への転換が進められる中、知的障害養護学校に多く在籍している自閉症の特性を示す児童生徒に対する適切な指導が課題となっている。

また、高機能自閉症を含めた特別な教育的支援の必要な児童生徒への支援として、養護学校における地域のセンターとしての役割の充実が喫緊の課題となっている。

本調査研究では、知的障害養護学校において調査を実施し、各校における自閉症児教育の実態を把握した。

また、自閉症児教育に先端的な研究を実施している養護学校への視察と共に情報収集を行い、その成果を踏まえて事例検討を進めた。

そして、小・中学校及び養護学校において、自閉症の特性に応じた指導内容や指導方法がわかる、教員向けのリーフレットとQ&A集を作成した。

埼玉県立総合教育センター 特別支援教育担当

目 次

I	研究の概要	
	1 研究主題設定の理由	1
	2 研究のねらい	1
	3 研究の方法	2
	4 研究の経過	3
II	リーフレット（一部抜粋）	4
III	Q&A集（一部抜粋）	5
IV	研究のまとめ	
	1 自閉症の特性を示す子どもたちへの共通理解	6

2 自閉症の教育における専門性の確保と向上 . . .	6
3 教職員の連携に基づいた指導体制の充実 . . .	7
4 地域のセンターとしての一歩	7
参考文献	8
スーパーバイザー・研究協力委員	8

研究主題

「知的障害養護学校における自閉症児の教育と支援の在り方に関する調査研究」 ～地域のセンターとしての役割を充実させるために～

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

平成13年1月の「21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人の教育的ニーズに応じた特別な支援の在り方について（最終報告）」では、「～知的障害と自閉症を併せ有する児童生徒等に対し、この二つの障害の違いを考慮しつつ、障害の特性に応じた対応について今後も研究が必要である。」という提言がなされた。また、平成15年3月の文部科学省調査研究協力者会議の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」では、盲・ろう・養護学校が地域のセンター的機能を担うべき小・中学校等への支援機能、そして高等部等への入学が予想される高機能自閉症の子どもたちへの対応が強調された。さらに、平成16年12月の中央教育審議会による「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（中間報告）」においても、「引き続き研究を進める必要がある。」と提言されており、今後の特別支援教育において自閉症教育の充実が重要な課題であると認識された。

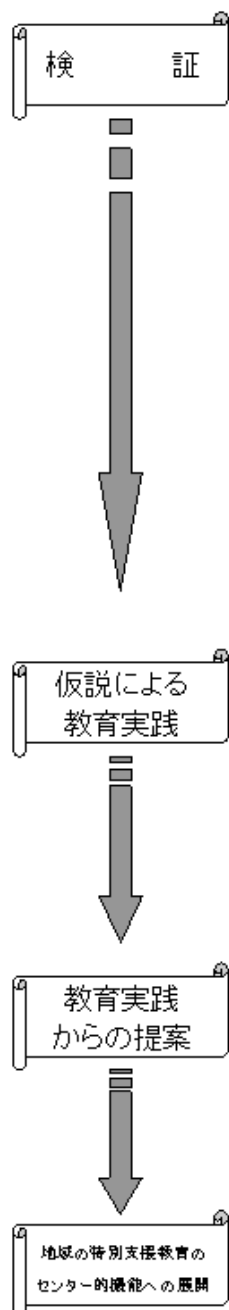
現在、障害のある子どもの教育については、障害の種類や程度等に応じて盲・ろう・養護学校及び小・中学校の特殊学級・通級指導教室において個に応じた指導が行われているが、今後は、さらに障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じて教育指導を行う体制について検討する必要がある。文部科学省の調査研究会が平成14年に行った「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」では、高機能自閉症と推測される子どもたちが0.8%＊₁いることが示されている。これに養護学校や特殊学級に在籍している自閉症を加えると1%を越え、その数は現在特殊教育の対象となっている障害の中で最も多い障害種である知的障害の割合を遙かに上回っている＊₂。また、知的障害養護学校在籍者の約3割＊₃が自閉症であると言われているが、これらの子どもたちは自閉症ではなく知的障害としての教育的対応をされているという現実がある。自閉症の子どもが多さと共に、知的障害とは異なる自閉症の障害特性及び自閉症の子どもを持つ困難性から、自閉症に対応した効果的な指導内容と指導方法について具体的に検討する必要がある。

こうした状況をふまえ、知的障害を伴う自閉症を中心に、知的障害と自閉症の障害の違いや障害特性に応じた対応の在り方について明らかにすると共に、知的障害養護学校の地域におけるセンターとしての役割について事例をとおして考察する。

2 研究のねらい

- (1) 各調査研究協力員が所属する知的障害養護学校において調査を行い、各校における自閉症児教育の実態を把握する。その中で、自閉症児への指導内容と指導方法における工夫と困り感について明らかにする。
 - (2) 自閉症児教育について先端的な研究を実施している東京学芸大学教育学部附属養護学校を視察すると共に情報収集を行う。その成果を踏まえて、各調査研究協力員の所属する知的養護学校において効果的な指導及び指導方法について、仮説を基に実践する。
 - (3) 小学校及び養護学校における自閉症の特性を示す児童生徒において、自閉症の特性に応じた指導内容や指導方法の指針となる教員向けのリーフレットとQ&A集を作成する。
- 以上3点を通じて、自閉症の特性を示す児童生徒への教育支援の充実を目指す。

3 研究の方法



- ・課題についての共通理解を図る。

各校における自閉症児教育の実態の把握

- ・指導内容や指導方法における各学校での工夫
 - ①自閉症児に対しての指導内容
 - ア 自立活動で重視している内容
 - イ 自閉症児について配慮している内容
 - ②指導方法において配慮している内容
- ・指導内容や指導方法における各学校での困り感
 - ①自閉症児の行動について
 - ②指導の体制について
 - ③自閉症児の活動の参加状況について

- ・埼玉大学教育学部附属養護学校での実践研究
- ・東京学芸大学教育学部附属養護学校の視察及び情報収集
- ・K J 法的手法を用いての教育実践における困り感の整理

各校の自閉症児教育の実態把握に基づく教育実践の実施

- ・自閉症特有の内容
- ・授業への参加を促す工夫
- ・個人のスキルアップを促す工夫

- ・浦和養護学校及び久喜養護学校での仮説による教育実践

自閉症の特性に応じた指導マニュアルの作成

- ・自閉症の特性に応じた指導内容の例示（知的発達障害＋ α ）
- ・自閉症の特性に応じた指導方法の提示（体制、課題提示、指導法等）

- ・さいたま市立大牧小学校・久喜市立本町小学校
- ・さいたま市立大宮東小学校での事例研究

4 研究の経過

- ◎第1回研究協力委員会 平成17年6月10日（金）
埼玉県立総合教育センター
 - ・調査研究委嘱式（養護学校調査研究協力員7名、スーパーバイザー1名を委嘱）
 - ・調査研究の趣旨説明
 - ・研究内容及び研究体制並びに日程等の協議
- ◎第2回研究協力委員会 平成17年7月5日（火）
埼玉大学教育学部附属養護学校
 - ・文教大学講師 霜田浩信先生による講話
「知的障害養護学校における自閉症児教育の在り方」
 - ・研究報告書の概要
- ◎第3回研究協力委員会 平成17年9月9日（金）
東京学芸大学教育学部附属養護学校
 - ・実践の研修（視察及び情報収集）
- ◎第4回研究協力委員会 平成17年10月11日（火）
埼玉県立浦和養護学校
 - ・実践授業と困り感のまとめ
- ◎第5回研究協力委員会 平成17年11月4日（金）
埼玉県立久喜養護学校
 - ・実践授業
 - ・小学校における課題の共有化
 - ・調査研究委嘱式（小学校調査研究協力員3名）
- ◎第6回研究協力委員会 平成17年12月9日（金）
さいたま市立大牧小学校
久喜市立本町小学校
12月13日（火）
さいたま市立大宮東小学校
 - ・小学校での事例研究
- ◎第7回研究協力委員会 平成18年1月13日（金）
埼玉県立総合教育センター

- ・研究成果についての全体協議
- ・文教大学講師 霜田浩信先生からの指導助言

<注>

- * 1 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果 平成14年2月～3月実施
- * 2 自閉症教育実践ガイドブック
平成16年6月発行 独立行政法人国立特殊教育総合研究所編
- * 3 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（第6回）議事要旨 平成15年1月

Ⅱ リーフレット（一部抜粋）

埼玉県立総合教育センター 平成17年度調査研究

自閉症の特性と支援のポイントについて

このリーフレットは、小・中学校及び養護学校の先生方に、学校生活で想定される自閉症の子どもたちの姿や抱える困難について、考えていただくものです。

1 対人関係について

人とのかかわり方が独特

- ☆表情や身振り・手振りを使ったり、理解したりすることが苦手
- ☆人とのかかわり方が一方的
- ☆興味や楽しみを他者と分かち合うことが困難
- ☆人の気持ちを察することが苦手

2 言葉によるコミュニケーションについて

言葉を状況や場面に合わせてうまく使えない

- ☆一方的で分かりにくい、話が飛びやすい
- ☆回りくどく、独特な言葉や調子で話をする
- ☆代名詞や言葉の裏の意味、曖昧な表現が通じにくい
- ☆冗談や皮肉が通じにくい

3 こだわりについて

生真面目・融通が利かないことがある

- ☆特定のマークや同じ色の服しか着ない
- ☆当番などきちんとやらないと気が済まない
- ☆時刻表や路線、特定のキャラクターに異常なほど興味を示す
- ☆回る物やキラキラ光る物を見続ける

4 環境の変化について

いつもと変わったときに困ってしまう

- ☆いつもと同じ手順や順番でないと困ってしまう
- ☆いつもと違うスケジュールだと困ってしまう
- ☆ものの置き方や道順の変化を嫌がる

5 見通しについて

時間と空間の意味づけが苦手

- ☆「ここはどこ？」
- ☆「なにをしよう？」
- ☆「いつまで やればいいの？」
- ☆「この後 どうなるの？」がなかなかわかりません

6 感覚について

聴覚・視覚・味覚・嗅覚・触覚の過敏さ

- ☆大きな音が反響する体育館などの場所や集会、朝会などの雰囲気は苦手
- ☆耳垢をとることや髪が苦手
- ☆のりや絵の具が手に付くことが苦手
- ☆トイレやプールの臭いが嫌で入ることができない
- ☆野菜や肉が極端に苦手などの偏食がある

7 多動・衝動性について

落ち着きがなく、考える前に行動してしまう

- ☆体の一部を床に動かしていたり、じっとしていらなかったりする
- ☆落ち着きがなく、すぐに席を離れてしまう
- ☆思いっぴきまに行動してしまう
- ☆教師の話が終わるまで聞かず突然答えを言ってしまう
- ☆待てなかったり、順番が守れなかったりする

8 パニックについて

きっかけは、周囲に!!

- ☆感覚の過敏性
- ☆自分の希望・思いと周囲や現実の状況が違ふ
- ☆やるべきこと・状況がわからない
- ☆過去の嫌なことを何かのきっかけで思い出す

自閉症・自閉的傾向の8つの特性



[リーフレット（PDFファイル）全体はこちら](#)

Ⅲ Q & A 集（一部抜粋）



教室の電気を消して回わる、水道の水を出しっぱなしにする、同じ持ち物にこだわる子がいます。どうすれば良いでしょうか。

（こだわりについて）

A 「こだわり」行動に対しては、なくすことより社会的に妥当な行動に変えていくことが大切です。



養護学校での指導例

花瓶など自分の気になるものが、いつも同じ場所に、同じ状態で置いていないと許すことができません。

- ①他人に迷惑がかからない、本人にとって身体的悪影響を及ぼさない場合は、認めてあげるようにする。社会的に妥当でない場合は、本人が落ち着ける他の様式に変えていくようにする。
- ②「一番になること」にこだわる児童・生徒に対しては、活動がゆっくりでも丁寧に取り組んでいる友だちを本人の前で称賛し、「一番になること」以外にも価値があることに気づけるようにする。また、順位にこだわらずに本人が活動に集中し、活動を成し遂げたときには大いに称賛し、達成感を味わう経験を増やしていくようにする。
- ③ある程度の「こだわり」は、本人にとって安定した生活を支える面もある。ただし、「こだわり」が強くなりすぎると、生活しづらくなる場合もあるので、授業の組み方や、流れを工夫することで、生活上のバリエーションを増やすようにする。



通常学級での指導例

同じキャラクターやマークにとっても執着したり、負けることが許せなかったりする子がいます。

- ①持ち物へのこだわりなど周囲の迷惑にならないことであればある程度の許容が必要である。
- ②興味関心を利用して、〇〇博士といった専門的分野で認められようにする。
- ③勝敗のあるゲームで勝ちにこだわる時は、負けた他の友達の頑張ったところをみんなの前で大いに称賛する。その子が勝った場合は、あまり大げさに取り上げないようにする。取り上げることでこだわりをむしろ強化してしまうことがある。



自閉症の特性について

- ☆こだわり行動については、無くすということより、社会的に妥当な行動に変換することが大切です。ただし、他人の迷惑にある行動については制限を加えていくことが考えられます。
- ☆負けや×は、自分が否定されたというような極端な捉え方が考えられます。また、常に自分には良い結果が訪れる、というイメージの弱さが関係していることもあります。その子の捉え方の状況を把握することで、事前の手だてが可能になります。
- ☆普段の生活様式や学習手順へのこだわりは、環境の変化に対応しにくいという特性と関連する場合もあります。万一変更する必要がある場合は、事前に伝えたり、新しい様式や

[Q & A 集（PDFファイル）全体はこちら](#)

Ⅳ 研究のまとめ

自閉症の特性を示す児童生徒は、対人関係やコミュニケーション、状況の理解などに多くの困難を抱えている。このことから、情緒障害教育及び知的障害教育では、諸外国の取組などを参考に、教材・教具や教室環境を整えるなどのほか、これまでの実践の積み重ねにより、特性に応じた指導方法が講じられてきていたが、まだ十分とは言えない状況である。特に、自閉症の特性を示す児童生徒に対しては、適切な対応がなされなければ、重大な二次的な障害（例えば、激しい自傷や他傷）が引き起こされる可能性もある。そのため、かかわりを展開する際には、個々の教員そして教師集団のさらなる専門性の向上が必要であり、指導者の養成をはじめ効果的な研修が必須と言える。

また、指導内容については、学習指導要領に知的障害養護学校の各教科として、生活上必要な指導内容が示されており、高機能自閉症等の児童生徒の一部を除いて、それらが必要な指導内容であると考えられている。しかし、対人関係やコミュニケーション、状況の理解などの困難さに特化した対応については、現行の学習指導要領に自立活動が指導内容として示されているが、自閉症の特性を考慮すると、実際の指導に当たっては、その内容の拡充や再整理などが必要であると考えられる。さらに、先端的な研究により、効果的な指導内容や指導方法を明らかにすると共に、適切な対応が求められている。

一方、自閉症の位置づけは、情緒障害教育において、主として心因性の情緒障害と発達障害である自閉症が分けられていないことから、両者が同一の学級に在籍している場合には、指導内容や方法が異なり、指導者が苦慮していることが多くある。また、自閉症が発達障害であるとの認識が一般にはまだ不十分であり、養育に要因があるとしたり、心因性としたりするなど、現在でもまだ誤解がある。情緒障害と自閉症、知的障害と自閉症の関係についてもより一層検討する必要性がある。先の「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」の最終報告の提言及び平成17年12月8日に中央教育審議会から答申のあった「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」などを踏まえ、自閉症の位置づけについて検討する必要があると考えられる。

以下は、本研究を通じて明らかになった今後の課題である。

1 自閉症の特性を示す子どもたちへの共通理解

自閉症の特性を示す子どもたちは十人十色だと言われている。個々の障害特性を理解した上で、個々の特性が絡み合い、さらに環境との相互作用もあって複雑な状態像が表れたことを理解することが重要である。個々の子どもの特性も成長の段階で、非常に顕著に表れる時期もあれば、ほとんど表れない時期もあると言われている。したがって、自閉症の診断基準でもある①対人関係の特異性②コミュニケーションの障害③こだわりと想像力の障害や症状及び障害特性を理解しながら指導内容や指導方法について、個々の子どもに求めていく姿勢が必要である。

2 自閉症の教育における専門性の確保と向上

自閉症の特性といっても、一人一人でその症状が微妙に違っていたり、複雑に絡み合ったりしている。自閉症の特性を単に知っているだけではなく、その特性に関する知識を個々に応じて理解し活用することが必要不可欠である。そのため、子どもたちが必要としている支援の内容を探り、指導目標を定め、指導を実行するためのアセスメントについて、自閉症の特性を考慮した心理検査や行動観察、保護者との連携等を行って実施できる専門性の確保と向上が必要である。また、自閉症の特性を示す子どもたちの中には、学校では考えられないような問題となる行動が家庭で生じたりするので、家庭や地域生活での情報も十分に把握しなければならない。

3 教職員の連携に基づいた指導体制の充実

自閉症の特性を示す子どもたちの教育に当たっては、教職員及び関係者の共通理解に基づき、一人一人の自閉症の特性に応じた指導内容と指導方法を適切に選択し指導に当たることが求められる。しかし、一人一人異なる子どもの特性の理解や適切な内容・方法の選択は必ずしも容易なものではない。それだけではなく、子どもにかかわる人々の理解の仕方や支援に対する考え方の違いが指導の一貫性を困難にってしまうという課題も横たわっている。このため、「文化」とも言われる自閉症の特性に応じた指導の充実を図るためには、関係者が子どもに関するさまざまな情報及び指導目標、内容、方法に関する判断を共有し、共同的に実践及び評価を行う取組を充実させなければならない。盲・ろう・養護学校の地域のセンターとしての役割は、その一翼を担うものである。

4 地域のセンターとしての一歩

盲・ろう・養護学校が地域のセンターとしての役割を充実させるためには、専門性の向上もさることながら、小・中学校との関係が円滑に連携が図れるような環境の醸成をしていくことが重要である。本調査では、自閉症の特性に応じた指導内容と指導方法のヒントとなるリーフレットとQ&A集を作成した。しかし、リーフレットとQ&A集は、あくまでもヒント集であって、各学校の実情に応じて、弾力的に対応することが適当である。これらの支援ツールを媒介として、盲・ろう・養

護学校と各小・中学校との協働を一步ずつ進めていきたい。

【参考文献】

自閉症支援マニュアル編集委員会（2004）「自閉症の世界へようこそー自閉症支援マニュアルー」 自閉症サポート研究会

小林重雄・園山繁樹・野口幸弘（2003）「自閉性障害の理解と援助」 コレール社

日本自閉症スペクトラム学会（2005）「自閉症スペクトラム児・者の理解と支援」 教育出版

尾崎洋一郎・草野和子・尾崎誠子（2005）「高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち」 同成社

バル・クミン ジュリア・リーチ ギル・スティーブンソン／齊藤万比古 監訳（2005）「教師のためのアスペルガー症候群ガイドブック」 中央法規

安達潤（2002）「岡山県高機能広汎性発達障害児・者の親の会主催 第1回小規模研修会 資料」

国立特殊教育総合研究所（2004）「自閉症教育実践ガイドブックー今の充実と明日への展望ー」 シアース教育新社

文部科学省（2004）「小・中学校におけるLD（学習障害）ADHD（注意欠陥／多動性障害） 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」

DSM－Ⅳ－TR（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳（2002）「精神疾患の診断・統計マニュアル」）

内山登紀夫・水野薫・吉田友子編（2002）「高機能自閉症・アスペルガー症候群入門ー正しい理解と対応のためにー」

ブレンダ・ボイド（落合みどり訳）（2006）「アスペルガー症候群の子育て200のヒント」 東京書籍

スーパーバイザー 研究協力委員	文教大学教育学部	講師	霜田 浩信
	県立浦和養護学校	教頭	黒須 文夫
担 当	県立浦和養護学校	教諭	須藤 幸恵
	県立浦和養護学校	教諭	宮前 純子
	県立久喜養護学校	教諭	藤原 卓也
	県立久喜養護学校	教諭	福地 一行
	埼玉大学教育学部附属養護学校	教諭	宮元 恵
	埼玉大学教育学部附属養護学校	教諭	大美賀 了
	さいたま市立大牧小学校	教諭	武内 玲子
	久喜市立本町小学校	教諭	園部 啓子
	さいたま市立大宮東小学校	教諭	川添 倫義
	県立総合教育センター	副 所 長	猪股 拓美
	同 特別支援教育担当	主任指導主事	櫻井 康博
		指導主事	清水 光雄
		指導主事	山口伸一郎
		指導主事	小池 浩次